

ブラッセル日本人学校における外国語会話指導に関する考察

— 日本の学校での活用に向けて —

前ブラッセル日本人学校 校長

京都市教育委員会生徒指導課 首席指導主事 白 崎 友 久

キーワード：小学校外国語活動，国際化，外国語理解，日本での外国語指導

1. はじめに

平成18年度にブラッセル日本人学校に派遣された。それまで京都市立中学校，京都市教育委員会に34年間お世話になり，京都の教育の伸展に取り組んできた。海外の日本人学校に派遣希望を出したのは，海外における有利でない条件の下で頑張っている子どもたちの教育の充実に取り組むためであった。

派遣に際して外国語会話指導についても興味があり注目していた。平成17年に京都市教育委員会が発行した『みんなで育むきょうとの教育』では，英語教育外国人指導員による英語活動，「京・英語スタンダード」の推進について書かれている。

それによると京都市では，国際文化観光都市，世界文化自由都市という京都市の特性を鑑み，子どもたちの外国語コミュニケーション能力の向上を図る取り組みとして，昭和54年から京都市独自のALT（ジェットプログラムによる英語教育外国人指導員）の配置，平成9年度から「きょうと・英語フロンティア・キッズ」による全小学校での英語活動の導入，平成12年度から小学校専任のALTの配置を行うなど，先進的な英語教育の取り組みを進めてきた。

そして，京都では平成17年度から，中学校卒業段階での「小中連携英語教育」の目標として，小中連携によるさらなる英語教育の充実を図ってきた。具体的には，小中で活用するALTを大幅に増員し，1人のALTが中学校とその中学校区内の小学校を巡回するとともに，中学校区単位で各小・中学校のALT配置時間数を決定するなど小・中学校が連携した取り組みを展開してきた。

これにより，全ての小学校において，ALTを活用した英語活動を展開するとともに，「英語教育」に関する小中連携の一層の推進や中学校区内の各小学校の英語活動の状況が均質化されることによる小中連携の推進，小学校から中学校へのスムーズな接続を図る取り組みの継続が可能になった。

そのうえで，京都市の教育改革では「英語を話せる子どもの育成」に取り組む英語科教員の悉皆集中研修（15年度から3年間で英語科の全教員に対して研修を実施し，全教員がTOEFLを受験し，指導力の向上を図っている。）を行い指導力の向上を目指してきた。そして，先駆的な取り組みとして平成16年12月，「全国小学校英語活動研究大会」第1回大会を全国40の都道府県から参加を得て開催するとともに，平成17年8月には，「小学校英語教育シンポジウム」を開催し，多くの参加者の下，熱心に小学校の英語活動について議論を行い，将来に向けた英語活動教育の方向性を示唆するシンポジウム等を行った。

このような状況を踏まえて，ブラッセル日本人学校への派遣を機に，ブラッセルの日本人学校が行っている外国語会話教育を研究し，今後の京都における外国語会話活動授業の前進の一助になればと思い研究を行った。

2. ブラッセル日本人学校での外国語活動

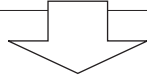
(1) 特徴的な取り組み

児童・生徒の英語力・仏語力の向上を目指した特徴的な取組として外国語活動のおび（おびな）時間（毎日20分ないし30分，週時程表の定時に設定）の授業である。開校時から外国語指導を行ってきたが，この授業システムの

おび（おび業）時間始めて8年目に入った。毎日20分～30分のネイティブによる英語・仏語会話授業を受けていることにより、特に、聞く力を中心に児童・生徒の英語力・仏語力が高まっている。なお、外国活動は小学校1・2年では仏語必修で、小学校3年生から中学校3年生までは仏語、英語からの選択で外国語活動授業を行なっている。

(2) 外国語指導の基本方針

<p>平成20年度外国語教育の基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国語学習の向上を図るおび（おび学）時間指導の弾力的な運用を継続する。 ・小学生は外国語学習を楽しむことを基本とする。 ・中学生は実践的なコミュニケーション能力を育成する。



(3) ブラッセル日本人学校の外国語教育の目標設定

	英会話	仏会話
小学部	<ul style="list-style-type: none"> ・音を大切にし、英会話に親しむことができる。 ・簡単な日常会話ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仏会話に親しむことができる。 ・簡単な日常会話ができる。
中学部	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な表現を使って自分の意思・考えを英語で伝えることができる。（中3卒業までに英検準2級（高校中級）程度） 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活で使える基本的な仏語会話ができるようになる。（フランス語検定4～5級程度） * 4級は大学で週1回2年間の学習量に相当

(4) 各グループの習熟の程度別の目標と目標実現に必要な力・態度

①低学年（初級）

- ・微妙な音の違いを聞き分けたり、発音できたりする喜びを味わうことができる。
- ・数や色の身の回りのものの名前をDVDやVTRを使って外国語で聞き取ったり、言えたりする喜びを味わうことができる。
- ・簡単な外国語の歌を歌ったり、ゲームをしたりする楽しさを味わうことができる。
- ・外国の人と挨拶や自己紹介ができたりする喜びを味わうことができる。
- ・音を聞き分けたり、発音したりする力
- ・数や色や動物や身近な品物などの名前を聞き取ったり、発音したりする力
- ・外国語の歌を歌ったり、外国語に関するゲームをしたりすることを楽しむ態度
- ・挨拶や自己紹介の簡単な慣用句や構文を活用する力

②中学年（中級）

- ・外国の人と挨拶（気分や天候も含めて）や自己紹介ができたり、簡単な質問ができたりする喜びを味わうことができる。
- ・比較的簡単な外国語の歌を歌ったり、外国語によるゲームをしたりする楽しさを味わうことができる。
- ・簡単な外国語による物語のVTRやDVDを見て大まかな内容が分かる喜びを味わうことができる。
- ・気分や天候に関わる単語や慣用句や構文を聞き取ったり、活用したりする力
- ・自分のことを紹介するために必要な簡単な単語や慣用句、構文を知ったり、活用したりする力
- ・外国語の歌を歌ったり、外国語に関するゲームをしたりすることを楽しむ態度
- ・物語の話の流れや動画の映像を参考にして、外国語の大まかな内容を理解する力

③高学年（上級）

- ・ 日常出会う様々な状況において外国の人と簡単な挨拶や質問をしたり，答えたりできる喜びを味わうことができる。
- ・ 外国語の歌を歌ったり，外国語によるゲームをしたり，簡単な外国語劇をする楽しさを味わうことができる。
- ・ 比較的簡単な外国語による物語のVTRやDVDを見て，大まかな内容が分かる喜びを味わうことができる。
- ・ 話したいことに関わる簡単な単語や慣用句，構文などを知り，それらを活用して挨拶したり，話したりする力
- ・ 自分のことを紹介するために必要な簡単な単語や慣用句，構文を知ったり，活用したりする力
- ・ 外国語の歌を歌ったり，外国語に関するゲームや外国語劇をしたりすることを楽しむ
- ・ 物語の話の流れや動画の映像を参考にして，外国語の大まかな内容を理解する力

以上のような外国語指導方針，外国語教育の目標設定や各グループの習熟度別目標をあげたが，それ以外に各学年における具体的な指導計画については割愛する。

(4) に示した習熟度別の目標については日本の各学校でも十分活用できる項目があげられている。京都の外国語活動に取り入れることができると考える。

3. 日本での外国語活動に向けて

(1) 教材整備

各都道府県教育委員会や市区町村教育センターなどでは新学習指導要領の外国語活動に向けて既に教材整備を行っている。京都市では本年度から使用するテキストや音声機材の整備も行い，それを使用した研修も行われている。また，小学校1年生から6年生まで全学年で外国語活動を実施する。そのための使用テキスト等は既に小学校英語活動研究会により数年前に開発されていた。そういう意味では教材の整備が大変重要な要素となる。

(2) 人材育成

全ての教育活動において指導者は重要なウェイトを占めている。適切な指導技術を持っていることは必要不可欠である。そのためには外国語指導が十分にできる人材が必要である。しかし，京都においては指導者の年齢が高く，「日本語を使つての指導には卓越しているが外国語での指導は不得意」，という指導者に対する対応が重要なポイントになるのではないかと。また，どの指導者も最低必要な指導技術や会話術を身につけることが大切である。そういう意味からも研修の充実が必要である。

(3) ネイティブスピーカーの確保

「生きた指導者」というか，外国語を母国語として使用している人からの指導は重要な要素となる。特に発音や構文の使い方などだけではなく，会話としてのポイントなど多くの指導に大切な要素を子どもたちに与えてくれる。ネイティブスピーカーの人材確保も重要な問題である。在外の日本人学校でもこの点については外国語指導のポイントとなっている。ましてや，ネイティブスピーカーの配置は日本の学校では非常に困難な点が大いにあると考える。国の体制としてこの点については考える必要がある。

(4) 外国語が使える体験

海外に生活する子どもたちは日本人学校で外国語を学習するが，その学習したことを実際に使うことができる場面を多く体験できる。これは大変重要でそれによって学習した外国語が自分のものとして実感できる。そういう経験をした日本人学校の子どもたちでさえ多く問題をかかえながら外国語学習の習得にむけて努力している。

日本の教室の中で学習したことを是非何処かで体験（使用）できる機会を多く作ることが大切である。そのこと

が子どもにとって一番よい学習になり、外国語の習得に向けた動機付けになると考える。できるだけ同年齢の子どもたちとの交流学習が必要であると思う。各都道府県にあるインターナショナルスクールや世界の各国が日本の中にもっている学校に積極的に訪問し交流することが最適である。そして、生きた教材を使って外国語の習得に励んで欲しい。

4. 終わりに

ベルギーでは現在3ヶ国語が使用されている。オランダ近くの北部地区ではフラマン語（オランダ語）、フランス近くの南部地区ではフランス語、そしてドイツの国境近い北東部ではドイツ語と3ヶ国語が公用語として使用されている。ブラッセル市内は北部地区の中にあるがフランス語を使用している。しかし、ベルギーでは主な使用言語以外に英語は必ず学習している。つまり、主要言語以外に第2外国語や第3外国語を学習する。例えばフラマン語（オランダ語）が主要言語であれば英語またはフランス語を第2外国語で学習する。第3外国語ではドイツ語を含めた言語から学習する。このようにベルギーの言語は複雑であるが英語は殆どの人が話せる。だからどこに行ってもある程度英語で通じる。

ヨーロッパに在住して感じることは、日常生活や街中で多くの言語が語られている。ベルギーで使用している言語以外にイタリア語、スペイン語、ポルトガル語等、通常生活していても直ぐ隣で話している言葉が多種にわたって聞こえてくる。

これはやはりアルファベット使用語源に大きな特徴があるだと思う。アクセントやイントネーションの違いによることや若干のスペルの違いなどがあっても容易に学習しやすい条件である。

今日本の小学校で外国語学習が始まった。漢字を使う日本人がこのアルファベットを使う学習にどれだけ対応できるのか、どれだけ時間がかかるのか、大きな不安が生じる。

しかし、日本が国際的に指導力を発揮し、世界をリードするためには経済力や技術力だけではなく国際人としての感覚を身につけて、ヨーロッパや世界の人々と語り会え、理解しあえる外国語言語能力を身につけなくてはならないことは明白である。



そういう意味から言えば、今後の「外国語活動」が「外国語授業」としての位置づけに変遷していくことが必要である。今後指導実績を積みあげながら外国語活動に確固たる信念をもって指導していくことが必要であると考えられる。